

[26]

氏名	岡村 心平 <small>おがむら しんぺい</small>
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第 27 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	フォーカシングにおける交差の機能に関する研究 —心理療法・メタファー・なぞかけ—
論文審査委員	主査教授 池見 陽 副査教授 串崎 真志 副査教授 村川 治彦

論文内容の要旨

本論文は問題と目的を提示する「第Ⅰ部（第 1 章）」、心理療法やフォーカシングについての理論的検討を主とする「第Ⅱ部（第 2 章～第 5 章）」、実際のセッション記録をもとにした新たな実践方法の検討を主とする「第Ⅲ部（第 6 章～第 9 章）」、これらの議論に関する総合考察を主とする「第Ⅳ部（第 10 章）」の 4 部構成となっている。

第Ⅰ部(第 1 章)では、フォーカシング実践とその考案者である Eugene Gendlin の哲学を概観し、フォーカシングと Gendlin 哲学における言語の位置づけとその特徴及びフォーカシングにおける言語機能を特徴づける「交差 (crossing)」の概念について論じている。Gendlin の業績全般における交差概念の概要や先行研究における交差概念の展開について参照した上で、本研究の目的として、(1) Gendlin の交差概念による心理療法実践の検討、(2) メタファーと言語の創造的な機能としての交差への着目、(3) 方法としての交差の実践応用の検討、及びその方法の考案、の 3 つをあげている。

第Ⅱ部(第 2 章～第 5 章)では、理論的検討として、心理療法におけるメタファーの機能やその特徴、さらに Gendlin のメタファー観、及びこれを特徴づける交差概念について概観した上で、フォーカシングにおけるメタファーの機能と、対人関係的な相互作用における交差概念の使用の特徴について検討している。

第 2 章では、心理療法におけるメタファーの使用の有効性を示す先行研究を整理し、修辞学的な分類(メタファー、シミリー、メトニミー)をもとにした心理臨床学的な知見や、認知言語学的な観点による心理療法のプロセスの分析に基づく知見などを参照している。第 3 章では、フォーカシング実践やその心理療法的応用におけるメタファーの機能に反映されている Gendlin のメタファーの捉え方について言及するために、Gendlin (1962/1997)、Gendlin (1986)、Gendlin (1991/1995) という 3 つの論述を参照しながら、Gendlin のメタファー観の推移について検討している。検討の結果、時代を経てある種の「進展」が認められる Gendlin のメタファー観では、言語による新たな理解の創造という観点がより重要

となっていることを明らかにしている。第4章では、前章におけるメタファーや交差の機能についての議論を参照しながら、フォーカシングにおけるメタファーの機能について検討している。さらにフォーカシングのプロセスについて、ハンドル表現として言い表す「諭える」という契機と、そのハンドル表現についての意味を問い、探求する「アスキング」のステップにおいて特徴的な「尋ねる」という契機の2つを論述している。第5章では、Gendlin(1991/1995)において見られる対人関係的な相互作用における交差への言及について、その脚注での議論を追いながら文献学的に検討を進めることで、心理療法における対人的な概念、特に「共感」をめぐる理論的な考察を行っている。

第Ⅲ部(第6章～第9章)では、実践的な検討として、交差の概念によって特徴づけられるなぞかけを用いたフォーカシング・ワーク「なぞかけフォーカシング」簡便法を考案したこと、その実際のセッション記録の提示、そして、そのプロセスの特徴について検討している。

第6章では、フォーカシングのプロセスにおけるハンドル表現とアスキングの関係について、言葉遊びである「なぞかけ(三段なぞ)」の特徴とのあいだの共通性を、Gendlinのメタファー論や交差概念から検討している。また、交差概念に特徴づけられるなぞかけにおける新たな理解の創造的なプロセスをめぐって、メタファーや、創造的な推論方法としてのアナロジー、あるいは仮説発見的な論理であるアブダクションとの関連について論じ、これらの創造的な推論における身体感覚の重要性について検討している。また、メタファーやアナロジーによる推論を特徴づける、認知意味論における「対応づけ」概念と、交差概念の比較検討を行い、創造的な思考法を支えるスロットの機能や、両者の相違点について整理している。第7章では、なぞかけの構造を利用したフォーカシング・ワークである「なぞかけフォーカシング」簡便法を考案したことが報告され、そのワークの進め方や実施上のポイントなどについて記述している。次に、実際のなぞかけフォーカシング・セッション記録を提示して、その特徴を理論的に検討している。第8章では、前章で提示したセッションとは別のなぞかけフォーカシングのセッション記録を提示し、交差の機能による「掛け合わせる」という創造的な思考方法の特徴について、人間性心理学における創造性についての言及から考察している。第9章では、第Ⅲ部においてテーマとしてきたなぞかけのような言葉遊びに本来備わっている創造的な特徴について、さらなる考察を行っている。まず、アリストテレスの比喻と謎の捉え方を参照し、そこで言及されている特徴についてGendlinの交差概念との関係を検討している。また、交差概念となぞなぞの関連をさらに示すために、その歴史的な事例として『不思議の国のアリス』に登場する「帽子屋のなぞなぞ」をめぐる逸話を紹介し、このなぞなぞと日本のなぞかけ、さらにはGendlinの交差概念に見られる共通点を指摘している。

第Ⅳ部(第10章)では、総合的考察として、本研究で明らかになった知見を整理し、同時にさらなる発展的な議論を踏まえながら(1)メタファーとアスキングの機能についての心理療法的意義、(2)なぞかけフォーカシングの実践的意義と遊ぶという観点、(3)メタファーと交差によって「新たな理解」を共有するプロセス、という3つの観点が論じられている。さらに、本研究の今後の展望について検討されている。

論文審査結果の要旨

本論文には2つの大きな特徴がある。その一つは、哲学者でありながら、APA(American Psychological Association)などの心理学会から6つもの心理学賞を受賞した Eugene Gendlin の哲学を、交差(crossing)の概念に焦点を絞って展望していること。このような研究資料はこれまでには存在しない。交差はメタファーによって2つの状況が掛け合わされ、状況の新しい意味が創造される言語行為であるが、岡村氏自身が心理療法といった言語行為に従事しているために、心理学～とりわけ心理療法実践や認知言語論～と哲学の接点として交差に着目したのは自然なことであろう。2つ目の特徴として、交差概念の心理療法への応用として、岡村氏は「なぞかけフォーカシング」を考案したこと、そしてその方法や実践を本論で提示したことがあげられる。このように、本論文は理論研究と実践研究の両方の側面をもっている。以下に、心理学研究科が定める博士学位論文審査基準に従って、審査委員の見解を述べる。

1. 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

Gendlin 哲学及やフォーカシング思考心理療法にはいろいろな側面があるが、岡村氏は交差概念に絞り込んでいることに、明確な問題意識が見受けられる。また、心理療法を実践する立場から、交差概念に注目しオリジナルなワークである「なぞかけフォーカシング」を見出していることから、課題設定は適切であることは明らかである。

2. 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

Gendlin の哲学文献を原文で辿り、関連がある哲学者、言語学者、心理療法家の論文も広く読み込んでいる。また、Gendlin のメタファーに関する考え方が、著作 *Experiencing and the Creation of Meaning* (1962), から著作 *Let Your Body Interpret Your Dreams* (1986) さらに論文 *Crossing and Dipping* (1995) と徐々に変化していったことを明らかにした論文は他になく、本論に含まれるこのレビューは学術価値が高いものに思える。

3. 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

本論文には大きくわけて2つの研究方法があり、哲学部分については、原文を引用しながら、理論的・文献学的に考察を進めている。また、なぞかけフォーカシングなどの心理療法実践については、実例の記録を提示して方法を解説している。これらは本論の課題に対して適切な研究方法である。

4. 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

本論は一貫して交差を扱っており、その意味で一貫性、整合性があり、理論考察から実践へと展開している論文構成は的確であると思われる。

5. 全体を通して学術的な独創性が認められること

そもそも本論文が取り上げている Gendlin 哲学を論じた研究書は日本には2冊程度しか存在しない中で、Gendlin 哲学の交差概念に絞り込むという着想は他になく、学術的な独創性がある。また、交差概念の方法論的展開としての「なぞかけフォーカシング」は岡村氏のオリジナルなメソッドであり、それを見出す独創性は明らかである。

6. 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

本論文の内容の一部は国内学会発表、国内学会誌、国内著書（分担執筆）で報告され、すでにカウンセリング・フォーカシング関係者が「なぞかけフォーカシング」を実践しており、社会に貢献している。岡村氏は本論の一部を中国でも発表し、中国のフォーカシング関係者には注目されている。しかし、岡村氏は英語で本論の内容を発表していない。「なぞかけ」といった日本語の言葉遊びをどのように英語で発信するのか、といった課題はあるものの、筆者（主査）の国際誌論文に岡村氏の交差概念の解釈を引用したところ、岡村氏の論文を英文で読みたいとの声が海外の学会関係者からあがっている。今後は英語圏に発信していく課題があると思われる。

以上のように、本論は博士論文審査基準からみて適切だと判断できる。よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。